

テーマ

40 考古学にとっての写真・映像とは

栗山 雅夫

はじめに

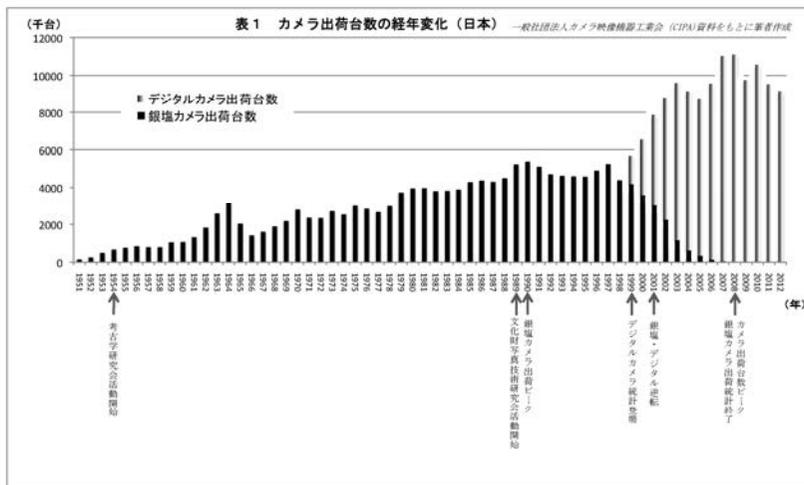
浜田耕作が『通論考古学』において、「器械に據る複製的記録中最も重要」なものを写真とし、「寫眞、圖書等の及ばざる所を、文字を以て補足するの態度を取る可きなり。」と説いたのは、大正 11 年 (1922)、約 90 年余り前のことである。浜田の写真・図版優先論は、「舊き考古學」と「新しき考古學」を区別する指標と捉えたものであった。また、これより 10 年余り遡った大正 2 年 (1913)、高橋健自による『考古學』の「附録 考古學研究法大要」においても、同様の記載があることを指摘できる。即ち、遺物の調査の際は「自然圖」をとり、出来るなら「寫眞」を撮っておくこと。遺跡踏査の場合も「寫眞なりスケッチなりして更に實測圖」を作成すべきであると説いている。写真が先端技術の側面も有した百年前のことである。

時を経て、田中琢は『埋文写真研究 Vol. 1』において「考古学は画像情報を主たる史料とし、文字情報を従とする」見解を示している。強弱はあるが、高橋や浜田が説いた調査研究方法の基本姿勢は、現代考古学にも受け継がれていることがわかる。そこで、本稿では近年一挙に進行した写真技術のデジタルシフトを踏まえ、考古学と写真の関係がどう推移するか、見通しを立ててみたい。

カメラ出荷台数の経年変化

考古学研究会が設立されたのは、昭和 29 年 (1954) のことである。写真をめぐる当時の時代背景を知るために、カメラの出荷台数の推移を示すグラフ (表 1) を作成した。これを見ると、当時は高度成長期の入り口にあつて、右肩上がりに出荷が伸び始める頃であつたことがわかる。ちなみに、筆者が関わる文化財写真技術研究会 (旧埋蔵文化財写真技術研究会) は、平成元年 (1989) に設立され、本年で四半世紀を迎えた。研究会設立翌年には、銀塩カメラの出荷がピークを迎えたが、バブル経済の崩壊を経て減少への道を進り始める間際の時期でもあり、複雑な心境である。

さて、この表で注目したいのは、1997 年に日本市場で第二のピーク (世界市場ではピーク) を迎えた銀塩カメラの出荷が、10 年後には少量出荷が故に統計上の要件を満たさなくなり、集計が終了したことである。全国の発掘調査現場では、まだまだ現役の主力機として活躍していることが多い銀塩カメラは、工業製品としては歴史の表舞台から既に姿を消してしまっているのである。発掘調査の記録や継続性の点で適切な写真機材の選択は重要であるが、このような事態であることを知る考古学関係者は少ない。



一方、銀塩カメラを駆逐する原動力となったデジタルカメラは、統計に登場した1999年のわずか2年後にはカメラの主役の座についている。驚くべき勢いで出荷台数を伸ばしたデジタルカメラは、皮肉なことに銀塩カメラが出荷統計を終了した2008年にピークを記録している。その数なんと11,111千台である。考古学研究会が設立された当時は、626千台であったから、実に17倍強まで市場が拡大したことになる。

デジタルシフトの内実

写真のデジタル化が考古学の調査研究にもたらすものは、どのようなものであろうか？カメラ機材、画像データ、活用部分に分けて考えてみたい。

まず、デジタルシフトにより写真の各側面がいかに変化したのか。カメラ機材に関わるものから挙げてみたい。フィルム・現像代を浮かすことができ、その気になれば数百枚、数千枚の単位でシャッターを切ることができる。高感度特性が銀塩とは比べ物にならないくらい向上したので、少々薄暗くても高速シャッターが可能。撮像板ひとつをとっても規格と機種が豊富。機材が高額で更新速度が早い。電池が必要…

次に画像データに関わるものを列挙する。その場で画像を確認できるので、ミスショットをすぐに消せる。画面内に日影部分があっても、現像処理時にツブレないように自分で補正することができる。保存するための装置や検索するデータベースの整備が不可欠。画像を読み取る装置が必要…

最後に取得した画像の活用について挙げてみたい。PC環境が整えば、デスク上でカラー・モノクロ図版のリサイズや画質の調整ができるので、報告書等印刷媒体の版下データを自分で作成できる。現地説明会等の資料を手軽に、カラー画像で作成できる。調査日誌等への利用も即日対応が可能…

以上、デジタルシフトにより写真のあり方は大きく変化しつつある。考古学写真と深く関連するものとして、特に次の3点は理解しておきたい。

①**機材費の高騰**：カメラのボディからレンズに至るまでデジタル設計になることで一桁高額に。これにPC周辺環境や画像保存環境の整備が上乘せされる。しかも、更新が数年単位。

②**品質の向上**：撮り直しが容易で高感度特性を活かしたブレ防止が期待できる。35mm・中判フィルムと比較すると画質の向上が見込まれる。

③**自己裁量の拡大**：撮影から現像、画像調整から版下作成、保存からマイグレーションとトータルの分野で面倒を見ることが出来る。

考古学にとって写真とは

最後に、デジタル化が写真の保存という側面にもたらした影響について、ひとつの例を紹介しておきたい。1990年に開発されたコダックの「PhotoCD」は、デジタル化の初期において、運用のしやすさと精度の高さから過去に撮影したフィルムコンバートツールとして、長期保存・永久保存を求める分野に普及をみた。ところが、2006年にサポート打ち切りが一方向的に発表され、以降のPC環境では画像を開くことすらできないようになり、データを別の形式にコンバートせざるをえない事態となった。その後、コダック自体も倒産してしまった。

デジタルアーカイブという勇ましい言葉で写真資料の永久保存を約束された気になったものの、実際はメーカーの思惑ひとつに委ねられる保存性の危うさが浮き彫りにされた事例である。

「複製的記録中最も重要」な写真を、資料として後世に永く遺そうと強く意識するきっかけとなったのは、半永久的なデータ保存を売りにしたデジタルの登場によるところが大きい。反面、長期保存を意識しても、デジタルは想像以上に短い寿命しか持たない事も我々は経験した。しかし、表1で示したとおり、納得するしないに関わらず、既に後戻りする道は絶たれてしまったようである。でも構わない。考古学の調査研究は、写真と図面と文章による複合記録として、その時々技術を結集して行うものである。百年前がそうであったように、改めて考古学における記録の意味を問い直そう。そして、写真実測がフォトマップに進化したように、先端技術のひとつとしてデジタルシフトする写真を考古学に応用し、21世紀の考古学をさらなる高みへと築いていけばいいのである。